

# 人・街・それぞれの物語を 「写真」に

株式会社清水スタジオ 代表取締役 清水 茂雄さん



株式会社清水スタジオは岐阜市金園町にある街の写真館です。創業は明治十八年。現在は四代目の清水茂雄さんが切り盛りしています。

二十五歳で後を継いでから、三十三年間、さまざまな岐阜の物語をファインダー越しに見つめ続けてきました。

## 跡継ぎは立候補

茂雄さんは三人兄弟の真ん中。高校生の時、兄弟三人が集められた席で「誰が跡を継ぐ?」という先代である父、二郎さんの問い合わせに手を挙げたのが茂雄さんでした。

「手に職がある写真館なら食いつばぐれが無いかな、位に思っていましたが、本当は兄弟の誰より写真が好きで、この仕事に興味を持っていたんでしようね」

大学卒業後、写真専門学校で学び、父の知人の写真館で三年間修業を経て家業に入りました。

「父から色々なことを学びました。特にしっかりと教えられたことはライティング(光の当て方)と着物の扱い方です。『被写体にあたる光を読め』そして『当てる光によって常に良いライティングを追求しなさい』と常々言つておりました」

時に、茂雄さんが家業に入った頃はホテルウェディングの絶頂期。毎回何組もの打掛や白無垢を着た花嫁を撮影するため、短時間で被写体のさりげない手の所作の細部まで、手早く美しく形作ることを求められました。

「着物を着た被写体の着物の捌き(扱い方)には、規則があります。袖のラインと足元のラインの柄を揃えたり、いかに滑らかに着物の柄が活けるように写せるか。写真に残し

たときに一番美しく残る形に仕上げることを常に考えています。父からの教えと、数をこなしたことが自分の技術の上達に繋がりました。それは今でもしっかりと活きています」

## 初代が記録したこの街の歴史

清水スタジオは、初代である清水鉄次郎さんが梅林公園近くに清水写真館として立ち上げたのが始まりです。鉄次郎さんは明治期、東京の写真師で旧来の湿式写真から乾式の写真にいち早く転じ「早撮り写真」で名声を博した江崎礼二の門下生で、東京での修行を終えてのことでした。

創業時は日本にカメラが入って四十年ほどしかたっていない時代で、カメラマンは「写真師」と呼ばれていました。明治二十四年の濃尾地震の際には、当時の新聞に「永久に色が変わらず早撮りの技に優れている梅林の写真師、清水鉄次郎氏」が震災の当日より県庁や宮内庁から撮影を委託され写真師として災害の記録に奔走した、と掲載されました。今日残る被災状況の記録に貢献したことは言うまでもありません。役所に委託されて撮影した写真のため、当時、販売するには許可が必要でしたが、百数十種に及ぶ写真の販売許可を得たことにより、親戚や知人の震災見舞いの謝

## この街の「いつもの写真館」であり続けたい

現在茂雄さんは『岐阜県写真館協会』の会長を引き受けています。

面倒見の良かった父の二郎さんはかつて『日本営業写真家協会』の会長を長く務めていました。「会業をしている」というより業界のお世話ばかりしていたというイメージです。私はその反動で役員など一切引き受けできませんでしたが、五年前に遂に『岐阜県写真館協会』会長を引き受けてしまいました。街の写真館を盛り上げるために私が出来ることが何か無いのか、その答えが会長就任でした。

実は茂雄さんが会長に就任した当時から温めてきたことがあります。

岐阜県内の写真館の写真を集めて写真展をやりたいと考えています。スタジオで撮影した写真のほかに、昔から手掛けている卒業アルバムの懐かしい一ページ、例えば、建て替え前の古い校舎の写真を飾ったり。写真館と卒業アルバムの写真を組み合わせた写真館ならではの写真展です。写真館で撮る写真のすばらしさと懐かしさをお届けしたいと思っています」

清水スタジオには、お宮参りや成人式の振袖といった節目を祝う装いだけでなく、野球のユニフォーム、剣道着など習い事の装い、もちろん普段着でも撮影に来店されます。またここ数年は「終活(人生の終わりのための活動)」として、自分が一番納得できる写真を遺影に使つて欲しいという生

「美濃のボトガラヒ事始め」  
三代目二郎さんが中心となって  
編纂した記念誌



株式会社清水スタジオ  
所在地 岐阜市金園町1-2-5  
TEL 058-264-7196  
FAX 058-262-3081

この街の「いつもの写真館」であり続けたい

清水スタジオには、お宮参りや成人式の振袖といった節目を祝う装いだけでなく、野球のユニフォーム、剣道着など習い事の装い、もちろん普段着でも撮影に来店されます。またここ数年は「終活(人生の終わりのための活動)」として、自分が一番納得できる写真を遺影に使つて欲しいという生

「負けないと思っています」

茂雄さんは、それぞれの

「今」という時間を写真に残す

ことで、未来へ繋いでいきます。この先もずっと「いつも

の街の写真館」で最高の一瞬



参考文献：北原糸子／メディア環境の近代化／株御茶／水書房／2012